

營團人の業務研究
【其の二】

特 244

345



兵庫食營叢書第五輯



始



特 244
345



營團人の業務研究

【兵食營叢書第五輯】

兵食糧營團發行



序 文

凡ての組織、凡ての機構の運営は、かゝつて人にあるのであります。食糧營團の運営も亦人により言はれてゐる事も、この趣旨からして、誰しも首肯し得らるゝ事と思ひます。従つて人即ち營團員の持つ夫れ／＼の能力を、最高度に發揮する事の出來得る機構の考案と、その能力を發揮せしむるための意志の發揚とは、正に營團運営の要諦であると思ひます。殊に今日に於いて特に必要なのは、營團員がその全力を捧げつくす意志の發揚であります。

我が兵庫縣食糧營團に於きましては、夙に「營團一家」の信念に基きまして、日常の業務に献身する精神の昂揚に努めてゐるのであります。然るに世間の一部にはなほ往々にして、昔日の殘滓たる利潤追求觀念を拭ひ切れないうで、未だに人を動かすに規則の鐵鎖と、黄金の魅力と、苛辣な鞭杖とを以つて爲してゐる傾が無いとは言へないのであります。私どもはこの種の觀念と方法を以てする人の動かしか方は斷然廢棄しなければなりません。明るく、そして美はしい「營團一家」の信念を基調として、營團員の一人一人が、規則や黄金や鞭杖の暗い影を思ひ浮べる事なく、伸び伸びとした潤達な心持で、自ら進み勇んで

その總力を傾けてこそ、營團の尊い使命は完遂せられるのであります。このやうに他力に俟つところなく、營團員自らの中より發する力こそ營團にとつて頼りであり、光りであります。

ここに收めました二篇は、何れも年若い營團員がその職場に於いてなされた、一つは業務上の研究を、一つは勤勞奉仕の體驗を書き誌したものでありますが、共に自ら發した力の結果である事に重點を置き、皆様にお贈り致し度いと思ふのであります。

斯くの如き研究や體驗は敢へて論文や體驗記の形をさらないが、我が營團に於いては、不斷に到るところに、存在してゐる事を確信致して居るのであります。

希はくば同じ營團一家の屋根のもとに住む若い家族の作品として愛讀して頂きたいと思ひます。それと共に私どもは、更に之に續く數多くの勞作を期待して已まないものである事を強くこの機會に申述べる次第であります。

昭和十八年九月

兵庫縣食糧營團

理事長 直木 太一郎

目次

序文

(直木理事長)

營團の運送業務に関する考察

(山本定勝)

一、陸上運送の現状

二、陸上輸送の将来

三、對策に就いて

早場米勤勞奉仕の記

(徳原莊太郎)

營團の運送業務に関する考察

第一業務部運送課 山本定勝

決まつた日に、決まつた分量を、決まつた價格で消費者の家庭まで届ける。今の時代にこんな配給をしてゐる物資は食糧營團の取扱ふ物以外にはない。國民はこの絶對的な安心感に依つて枕を高く明日の戦力増強に努める事が出来る。どんな立派な食糧政策が樹てられても消費者の手許に現品が届かなければ、いや少くとも食糧營團の配給所の庭に何時でもこの準備が出来てゐなければ國民は決して安心をしない。戦ふ國民に喰ふ心配を與へない事は食糧營團の大きな使命であり、その達成には運送が基本要件の一つである。「配給は運送なり」と私は極言したい。この大切な運送の現状と困難な將來の情勢に就いて日頃考へてゐる事を思ひ出のまゝに書いて見たいと思ふ。

一、陸上輸送の現状

凡そどんな物資でもその原料の生産から製品の消費まで、單一の機關によりて輸送が完了されるものは

殆ど無い。船、汽車、自動車、牛馬車、手車等色々の運送機關によつてリレー式に運ばれてゐる。つまり物は常に色々の道に添つて流れてゐてこの流れをよどみなく圓滑に流すのが運輸の理想であつて、これのために総合一貫的な整備計畫が必要である事は勿論である。處が實際に色々の輸送機關が一齊に歩調を揃へる事は仲々困難で、とかく跛行的になり易い。

國家が高度國防の建設態勢に入ると、國家活動は急に活潑の度を加へて物の動きは激しくなり、輸送の需要は大變増して来る。まして戦争ともなれば一層これに激しい變調を來す事になる。先づ軍事に關する需要が夥しい量になり、次に軍需の重要物資輸送、次に生産力擴充關係の原材料、燃料等の輸送量が次第に増してゆく、一方銃後の護りを固くし長期戦に勝ち抜く爲には、國民生活の最低限度はどうしても維持せなければならぬ。これが爲に必要な米、麥、雜穀、砂糖、木炭、石炭、衣料等の生活必需物資の輸送も亦絶対に確保せなければならぬ。

之に對して輸送力の供給は反對に減少の傾向をたどるやうになる。汽車に就いて見ても、機關車や貨車を、大きくしたり増したり、線路の増設や、港灣や驛の施設改良、列車の増發等色々積極的な計畫が必要であるのに、事實は全く反對で、お上の手でさへ諸資材が手廻り困難な上に配給が不均衡で、車輛は思ふやうに増せず、工事は繰延べ、石炭や電力の消費規正で列車回数さへ減らすの止むない有様である。自動

車に就いても同じ事で、戦争が始まると老大な軍需を賄ふ爲に、民需向ガソリンの消費規正が行はれる事は當然の對策で、石油資源の豊富を誇る敵アメリカでさへその例外ではない。我國でも支那事變勃發から他の凡ゆる物資に先驅けて、十二年五月にガソリンの切符制が實施せられ、それ以來段々と締め上げて、太平洋の風雲愈々急を告げるや國際情勢の激變に備へる爲、十六年十月から自動車用ガソリンは殆ど禁止的な制限を受け、愈々本年七月から遂に石油の專賣制實施とまで來て了つた。遊覽バス、自家用乗用車は無論、タクシー、バスにも配給を止めて、専ら貨物自動車に配給量を集中すると共に、代用燃料への積極的轉換を強行して輸送力の維持に頑張つたが、ガソリンの供給量が餘りに少いのと、代用燃料の不廻りや轉換資材、能力の不足等で、輸送力は次第弱りの外はない。車輛も部分品も外國からは來ない。新車は國産に求めるより仕様が無いが資材の割當が足りぬ。新規増車が困難のみならず、故障の修理、廢車の補充も充分出來ない状態である。

十七年十月六日の閣議で決まつた「戦時陸運の非常體制」によつて、出來るだけ船の貨物を陸運へ轉嫁し、剩つた船腹で滿支、南方の物資を運ぼうと言ふ方策に對して、大運送の汽車は斯の通り、小運送の主力たる自動車亦斯の通り、その他荷馬牛車、荷車、リヤカー等の小運搬具による輸送力も、資材、勞務の不足から著しく減つて來た。そうして自動車以下の小運送力の困難は、小運送だけの問題に止まらず、

延いて大運送力にも大きな影響を及ぼし、「陸運の體制」が整はなければ海運の計畫も遂行出来ぬと言ふ事になる。

幾つかの機關によつてリレー式に行はれる運送の段階を、概ね次の様に區分すると後を書くのに便利である。尤もこれは私が勝手に決めた營團で日常使ふ概念的なもので、理論的な定義に基くものではない。

一、大 運 送

レール上の貨車による鐵道の運送作業を謂ふ。

二、小 運 送

鐵道運送に隨伴して、貨物發著驛に於ける集散作業と、商業的な取扱業を營む運送業者の作業を謂ふ。

三、地 場 運 送

近距離に於ける出荷倉庫より、加工場又は配給所に至る貨物の自動車、荷馬牛車等による運搬作業を謂ふ。

四、運 搬

加工場より配給所に至る製品の運搬作業を謂ふ。

五、配 達

配給所より直接消費者に至る運搬作業を謂ふ。

二、陸上輸送の將來

輸送需給の均衡を圖る爲には輸送能率の昂上と、輸送需要の調整とが講ぜられねばならぬ。能率の昂上としては車輛の積載效率（増し積）と運用效率（増し回轉）の高揚をやらねばならぬが、今日の陸運に於ては既にこんな手は殆ど出盡したかと思はれる。需要の調整については、既に鐵道も自動車も引請け貨物を制限したり、輸送順位を定めたりしてゐるが、戦争が長引くに従ひ輸送需給は段々と逼迫の度を加へる事は、誰でも想像出来る事と思ふ。愈々不足する資材勞務は、軍事、軍需、生産擴充と重點的に充當せられて、一般民需に振り當てられる量は極めて少くなる。この僅かな民需資材、勞務で國民生活の最低限度を維持せねばならぬ。餓死してすへば戦争には勝てぬ。最少の資材と勞力で銃後食糧の輸送は何が何でも確保せねばならぬ。食糧營團の運送業務は次第に重荷を負ふ事になる。

汽車と自動車は陸運の兩翼であつて、そのどちらにも輕重の差はないが、内地の貨物輸送について見る

に、距離は別として量の絶対値は、汽車の年間一億數千萬噸に對して自動車は二億數千萬噸で自動車の方が遙かに多いと言はれる。汽車の事は暫く措いて自動車の將來はどうなるのであらうか。この頃の戦争では兵一〇人に一臺の割合で自動車が要ると言はれる。假りに五百萬人の兵員を動かせば五十萬臺の自動車が要る譯で、しかも激しい使ひ方をするから、その壽命は平均一ケ年と見られる。すると毎年同數の車輛を補充して行かねばならぬ。結局戦争の續く限り自動車は幾ら有つても足りないと言ふ結論になる。これに對して我國が一體何れ位の製造能力を持つか知る由もないが、交戦諸國より立ち遅れの我が自動車工業の現状と、この大きい消耗數と睨み合せてはたまらない。従つて將來まだまだ軍の需めに應じて、民間保有車の徵發がある事を常に考へて置かねばならぬ。

ガソリンについて見ても、大東亞圈内の天然石油の年産額は約一千万噸と言はれ、將來はもつと増産が期待出來そうであるから、戦争が濟めば湯水の様に使へるであらう等と思ふのは今までの島國根性で、將來の日本は滿、支、南方諸國と所謂大東亞共榮圈を對象として物事を考へねばならぬ。この大東亞の石油總需要量は年二千萬噸を下らぬと言はれるから、將來尙どし／＼増加する圈内自動車の全部を天然石油のみで賄ふ事は、無論出來ない相談である。飛行機用揮發油生産の副産物として、自動車用揮發油は相當量を得られるであらうが、品質はひどく低下し、然もこうして得られたものは最悪有事の際の貯藏として保

有され、之を民需に振り向けて贅澤に使はす様な事は到底許されまい。つまりガソリンも將來益々窮屈になる事は判り切つた話である。

今日所謂代燃としての主流をなすものに、木炭と薪があるが、之は我國の資源政策から見て決して適當とは思はれない。其他人造石油を始めとして輕油、アルコール、石炭、コークライト、壓縮ガス、アセチレン等色々の代用燃料を並べる事は出來るが、之等は皆資源に乏しく裝置資材にも困り、まだ／＼研究の過程にあつて本格的な利用は一寸近い將來に望み難い。

自動車が當てにならぬとすれば當然荷馬車を考へねばならぬ。近世機械力の發達によつて畜力の需要が減つた事は確である。馬が都會から次第に姿を減じて農村に還へり、全体から見れば大した増減がなく、世界の總馬數は依然として約七千萬頭と算へられてゐる。戦争による馬の需要と損耗は之亦大きなもので前の歐洲大戰では參加馬數が遂に兵員の三分の一を超へその四年間に參加馬數の半分を失つたと言ふ事である。元來國內の馬の二割五分が戰場へ出たら銃後の産業に大きな影響を及ぼすと言はれてゐるが、支那事變前約百五十萬頭で漸く世界第十四位であつた我國が、ソ聯の一千五百餘萬頭、アメリカの一千一百萬頭に較べて、其後の生産と損耗とを考へ合すとき、將來の長期戦に備へて前線に銃後に、我國馬匹資源の容易ならぬ状態は思ひ半ばに過ぎるものがある。將來戦局の進むにつれて民間の軍用保護馬がたび／＼微

發される事は、自動車と同様常時覺悟して置かねばならぬ。

食糧の消費規正が行はれる以上、家畜飼料の窮屈なことは當然である。荷馬車輛、馬具、蹄鐵、厩舎設備等色々の資材も、將來段々と手に入れ難くなり、一臺の荷車、一戸の馬房を作るさへまことに容易な事ではない。馬と車と飼料と厩、それに馬子を加へて五拍子揃はねば動かぬ荷馬車である。五本の指とも痛い拳骨に何の力が望めやうと言ふ事になる。

斯様に機械力、畜力による運搬力の減退は何によつて補はねばならぬか。こゝに當然需められるのは人の勞力である。言ひ換へれば將來の運搬は次第に原始的な型態に還へる事を求められるであらうと思はれる。勞働をしてゐる人はもつとく精を出し、勞働をしてゐない人もどんく勞働をする事になり、自分の體一つをたよりに片附けて行かねばならぬ。然も勞力の中心をなす若い男子は戦線へ送られ、國內では軍需生産方面へ振向けられて、一般勞力の需給は次第に缺状差を加へて、働いても働いてもまだ足らぬと言ふ事になつて来る。

三、對策に就いて

物についても、人についても、悲觀ばかりしてゐてはどうにもならぬ。食糧の輸送が行き詰つては戦争

に勝てない。官民一致、全智全能を絞つて凡ゆる困難を克服して國家百年の大計を過らぬやう、長期戦を勝ち抜く輸送態勢を整へねばならぬ。

大運送については先づ國鐵の方へ研究をおまかせして置いて、小運送以下の對策について非見を述べて見たい。國家百年の大計と言つたが、差し當り三、五年先の見透しによつて考へれば可いのではないか。今から十年先の事は今から五年先に又考へれば可いと思ふ。極く近視眼的な見方であるが、之は全く百年の大計をゆつくり考へ込んでゐる暇がない程、今日の狀態が差し迫つて來てゐるからである。

自 動 車

小運送、地場運送に使ふ自動車にしる馬車にしる、運搬、配達に使ふ荷車、リヤカー乃至は自轉車にしる、資材の補給が困難である以上、現有の資材を大切に使用して效用を引き延ばし、改良工夫を加へて効率を高める事を考へるのが先づ常識である。

イ、自動車行政の一元化

自動車の製造行政は商工省、運行監督は鐵道省、燃料の製造配給は商工、農林、道路行政は内務省、業

種によつては鐵道省、又は地方廳の認可事業とされる等、まち／＼な自動車行政を改めて陸、海、空を打つて一丸とした総合的な交通政策を擔當する交通省を設けるか、それが難しければ陸運だけでも統一して鐵道、自動車、道路を一括監督する陸運省を設ける事が一番望ましい。そして自動車の製造から、燃料其他資材の配給運行の統制まで、一元的に管掌する事が是非共必要である。本年七月二十日の閣議で鐵道車輛の計畫生産を確保する爲、鐵道車輛工場を指定して鐵道省の管理とすると共に、鐵道車輛工業を五大重點産業なみに取扱ふ旨を決定發表されたが、同じ運行監督を受ける自動車としては片手落ちの措置であり商工省に對して自動車工業こそ五大重點産業の隨一ではないかと言ひたくなる。

ロ、輸送順位の昂上

十六年六月十八日の鐵道省告示で、貨物自動車の運送引受につき、重要物資を優先的に輸送せしめる爲にその順位を左の様に定めてゐる。

- イ、軍需品、軍關係資材
- ロ、天災事變に因り緊急運送を要する物資
- ハ、米穀類、生鮮食料品、木炭

ニ、ホ、マ、トと同じ重要物資の中で米は第三位に置かれてゐる。

並べた文字の上から見れば止むを得ぬ順位である。とは言へ「腹が減つては戦が出来ぬ」論法から言へば、米は軍需品である。戦争は前線だけではない。總力戦と言つて銃後も同じ戦線となつた今日、戦ふ國民の食糧は正しく軍需品である。本年七月十九日地方長官會議の席上で、東條首相は食糧は兵器であると説明された。米の輸送順位は當然イの一番に置き換へられねばならぬ。

ハ、自動車運送業者に望む

貨物自動車運送事業組合の力によつて自動車の動きが明朗になつた事は事實であるが、まだ／＼業者を整備統合し、もつと強く國家の意思を滲透せしめて國策輸送に従事して貰はねばならぬ。各地共整備強化の最中であるが、先づ業者が戦局の現段階を直視して翻然と營利主義、利潤追及主義を捨てる事である。戦争に勝たんが爲の重要物資の輸送をがっちり引請ける事である。之等は大抵利益の少ないもので、殊に米等は運賃が到つて安い、限られた輸送力は先づ之等に重點的に集中して、不急不要な運送はたとへ利益が多くても抑へつけねばならぬ。今尙時々この反對の事實があるとすれば國家の爲にも、業者自身の爲にも大變遺憾な事である。一日も早く小異を捨て、大同に就き、統合整備に相協力して輸送報國の實を揚

げて頂きたいと思ふ。

統合の主体が組合になるか會社になるか判らないが、之と重要物資を扱ふ荷主とががつちり手を組めば先づ安泰である。無論賃率の競合等は消えて無くなるから、認可率一ぱいで計算する事になり、荷主としては相當負擔を増す勘定であるが是は止むを得ぬ。營團あたりが今更自家用自動車の三臺や五臺を持つて、少い燃料、資材に困り、修繕に困り、勞務員の確保に困り抜く割合に能率が上らぬよりは遙かにましである。やるならどこかの自動車運送會社へ、投資をして肩替りをするなり又は買収するなりの手もあるが、これとて一定の地區には適當であるかも知れぬが、營團の全地區に對しては不向である。

二、燃

料

何れにしても困るのは燃料の問題である。ガソリンが本來の自動車用燃料であつて、其他をすべて代用燃料とする考へ方は少くとも大東亞に關する限り訂正せねばならぬ。日本にアメリカ製の自動車が、アメリカ産の石油で横行氾濫した事は、アメリカ資本主義の政策に乗せられた誤りであつて、最早昔の悪夢に過ぎない。今こそ純日本的の性格に基く燃料政策を樹てねばならぬ時代である。

燃料に關する専門的な智識を持ち合せがないが、石炭、コークライト等は量に於て相當豊富ではあらうが

瓦斯用として品質及び取扱ひの點で難色があり、又壓縮ガス、アセチレンのやうなものは大量供給の點に難色があり、保安の上にも相當な設備が要る等の理由で、仲々普及が難かしい事は前にも述べた通りである。其他南方諸地域に澤山採れる砂糖を原料とするアルコールを揮發油に混ぜたり、又は之を單體で使つたりする事も時々話題になるが、單に話題として止めず、之等に就いては今後徹底的な研究を遂げ、一番適當な燃料の種類を見出すと共に、この燃料に適する自動車の設計を考へねばならぬ。それには一部の人の研究にまかせて置かずに、少くとも自動車に關係のあるものは進んで困難にぶつかり、好んで研究を遂げる事が大切である。極く最近トラックの運轉手が途中で燃料を切らし困り果てた擧句、新聞紙を燃やして數料を走つたと言ふ話を聞いた。自動車運送屋が「代燃では採算が合はぬ」と言つて、その取扱ひを嫌ふやうなけち臭ひ了見はさらりと捨て、將來の燃料政策に心から協力せねばならぬ時代である。

自動車行政が一元的に強化せられ、米の輸送順位が繰上げられ、自動車運送業者の整備統合が完成し、燃料の研究が確立したら營團の自動車運送の態勢は先づ申し分がない譯であるが何れも早急に望む事は出來ないかも知れぬ。差し當り明日の問題としては是非共實現したい事は、營團に於て必要とする最低限度の自動車燃料を、縣當局から事業組合を通じて直接營團に配給交付を受け、これを運送會社に營團が使つた實績に應じて交付する段取りにしたいと思ふ。營團がこの燃料を握りさへすれば、恰も自家用車と變りな

く殆ど自由に操車が出来て、これにより自動車による運搬の計畫が毎日はずきりと立てられる譯である。當營團としても力の弱い代燃車を嫌はずに場合によつては積載量を減らし、運賃に多少の犠牲を拂つても努めて燃料國策に協力し、運送業者を助成してやる心構へが必要である。

荷 馬 車

荷馬車は自動車に較べて餘程原始的な運搬力であるが、時局に従つてその效用賃値は昔に還へり遙かに自動車を凌ぐ勢ひである。小運送、地場運送、運搬から配達まで利用範圍も一番廣く營團運送業務の主力とも言ひ得やう。唯動力が生きものであるだけに相當厄介な世話が焼けるが、装置が簡單で耐久力も比較的永い。

産地で若い馬を買付けて上手に使用すれば馬匹資源の國策にも適ひ、巧く運営すればまことに重寶な運搬機關である。自動車輸送力の減退をどうしても荷馬車に轉移して補充せねばならぬ爲め、營團としても出来るだけ多く之を保有する必要にせまられてゐる。然し前にも述べた通り車輛、飼料、厩、馬子と困難な條件が伴ふため仲々思ふ様に整備が出来ない。

イ、馬 子

殊に馬子の勞務は馬車と離して考へる事が出来ない重要な問題である。時局下この勞務をどうして確保するか、一番難かしい問題と思ふ。無論賃銀給與を増す事によつて或る程度まで保留する事は出来るが、こればかりが絶對的のものではない。馬子の内には馬を扱ふ事が好きで、馬と一緒に働く事が道樂の様な氣質のものもある。従つて屈托のない暮して相當歳を取つた馬子も居る。これらは何かのはづみに心機が一轉すればいつでも仕事をやめて了ふ。營團の現状に就いて見るに、營團と馬子とは何等身分的關係が無く赤の他人である。營團と言ふ家族の外にあつて自分の爲に働いてゐるに過ぎぬものが多い。中には時局を辨へぬ素質の良くないものもあつて、これを全部家族として直ぐに引き入れる事はどうかと思ふ。さりとて此のまゝ放つても置けない。何とか合理的な對策を思案中であるが、終局の目的は營團に抱擁して了ふ事である。つまり賃銀や勞務の法規で縛る事は時として手段であつても營團本來の意圖ではない。家族主義の濫い手を差し延べてその勞務を迎へ入れねばならぬ。そして新らしい皇國勤勞觀の上に立たせて、指導と訓練によつて素質を昂上せしめ、立派な營團人に仕上げて了はねばならぬ。その生活を保證してやると共に厚生施設にも加入せしめ、優秀なものは課長、出張所長にでも成れる希望を持たせる事であ

る。

當面の對策としては先づ勞務法規の手續き關係を整備し、馬子達の組合を組織して營團から之に一定の助成法を講じ、組合員は營團の勞務囑託の資格を與へて優遇し、素質の良いものから漸時職員に引き立てる計畫を進めたい。

今のところ營團の荷馬車運送力を構成してゐる組織がまちまちで賃銀の支拂方法も不統一である。これを是正して組織立つた營團の型に倣ねばならぬが、馬子達の中には半島人も相當に居るし、今日の國家觀念から説き付けることは一通りの業ではないが、是非共やり遂げねばならぬ仕事である。近頃めつきりふえて來た賃銀値上げ要求問題も、一部はこの組織の缺陷から生じて來る。つまり營團と馬子との間に一つの資本が介在してゐるのが多い。これらの内出來るだけのものは營團の資本に移し、出來ないものは驅逐するより仕方がない。當面の値上げ要求問題は餘程慎重に對處せねばならぬが、大體に於て相當の要求には應ぜねばならぬ實情に立ち到つてゐるのではないかと思はれる。

ロ、飼

料

馬は本來草食動物であるから、その自然的で一番適當な飼料は草類であるが、改良せられた今日の大き

い馬で、然も都會で激しい勞役に服してゐるものには草だけでは榮養も足りないし、之を多く與へる事も困難であるから相當多量の穀類を與へねばならぬ。藪、米糠、大麥、燕麥、高粱、大豆と言ふ様な濃厚飼料が必要であるが、今日の食糧事情からどれもこれも見遁せない重要な對象資源である。小麥を醬麥の過程に留めると藪が出來なくなる。精米の搗度を下げるから米糠が無くなる。卒直に言へば馬の飼料が殆んど人間の食糧に出世するのである。食糧の増産に輸送に、懸命に働いて呉れる馬に對してまことに相濟まぬ次第であると思ふ。

自動車の代燃と同様、馬の代用飼料を研究せねばならぬが、基本飼料が草であり、良い草こそ馬にとつて必要な色々の養分を、然も適當な割合で含んでゐる天與の食物である以上、草の獲得に力を入れて、濃厚飼料は必要の最少限に止める事が一番近道ではあるまいか。各府縣共飼料の自給自足には夫れ／＼工夫をこらして立派な成績を擧げてゐる地方もある。本年七月三日農林次官通牒を以て各地方長官宛に堆肥生産倍加、飼料自給増産の舉國草刈運動の實施要項が示されたが、それによると「目標は三億貫、時局下飼料の増産が食糧の増産確保並に輸送力増強に不可欠なるに鑑み、汎く各種團體、學校の協力實踐を要請する。實施は六月より十一月とし乾草調製其他加工作業を勵行し、各季飼料としての貯藏量増大を期する」とある。各種團體の奉仕に俟たず營團自身の勤勞で、少くとも營團の自給自足をやつて見る必要が是非共

ある。乾草の調製には幾らかの智識と技能が要るであらうが、馬事會なり、畜産組合なり、縣當局の指導を仰いで講習會でも開催すれば容易に習得する事が出来やう。

尙切藁、寝藁等も縣當局の諒解を得て縣販聯の斡旋により、收穫時に農家から直接購入して大量に貯藏して置く事も是非必要である。

こんな仕事は本縣だけでやり難いとあれば、地方行政協議會に呼びかけて近府縣ブロックでやる事も効果的であると思ふ。

ハ、厩

馬はもと／＼野生の動物であつて、厩は必ずしも必要でないと思ふかも知れぬが、それは年中野生的な自由生活をしてゐる時なら兎に角、一旦繋がれて勞役に従ひ、その生活が規則化して來ると厩の必要な事は當然である。一日の勤勞を終へて楽しい我家へ歸り、足腰を伸ばしてゆつくり休食してこそ明日の仕事に精を出す事が出来るのは人も馬も變りはない。今日馬の大切な事を知り馬の大きな恩を悟る以上、せめて厩の設備だけでも出来るだけ良くしてやりたいものである。今營團が使つてゐる厩の狀況はと言へば中には相當行き届いたものもあるが、遺憾ながら極めてお粗末なものが多い。神戸市以外の出張所、支部の

方が比較的立派で、肝心の神戸市内がお話しにならぬ。漸く雨露を凌ぐ程度で、鼻持ちのならぬ狭い馬房が數ヶ所に散在してゐる。そして人間の住宅難と同様、こんな厩が一馬房に二百圓も二百五十圓もの老舗が付いてゐる状態である。

衛生上の見地から都會ではどこまでも厩を造る事は許されない。少し人里離れた邊鄙な場所であればならぬが、朝夕これがために五料も十料も無駄足を運んでゐる事も考へねばならぬ。戦争に勝たんが爲めの輸送力確保なら、多少見方を換へて市内の適當な場所に澤山馬を入れる厩が許されたいものである。尤も歸り車の利用もあり、特に空爆の被害等も考へて全部の馬を一ヶ所に集める事は萬全でもないから、神戸市の場合先づ三ヶ所位に配して置くのが理想であらう。

厩の設計は「高燥にして日當り良く、適度の廣さを有し、冬暖、夏冷、採光、換氣良好、飼料管理に便利にして而も清潔、閑靜、災害の危険なくして、馬の休養に便なるを要する事住宅に於けると同様」とあるが、時局下こんな贅澤は望める道理がない。設備資材の不足を補ふには行き届いた掃除と、手まめな世話によつて人馬の親和が一番大切な事である。厩には責任のある當番と、馬好きの世話人を付ける事で之等に適當な人を得たら馬の使育に大きな力を添へる事は無論である。糞尿、寝藁の厩肥料も食糧増産に一役買はせる事が出来る譯である。

従業員の配達勞務

配達に専ら營團員によつて行はれる。運送の型態が次第に原始的になると言つたが、こゝに至つて「營團の勞務」と直接大きな關聯を顯はして來る事になる。

「勞力と經費にどんな犠牲を拂つても飽くまで配達を續ける。」これが營團の本質的主義である。とすれば將來どんな困難と戦つても自分の體が一つある限りは、絶対に配達をやめぬと言ふところまでやり抜く心構へが必要である。職務の爲には斃れて後止むの覺悟は結構であるが、斃れて了つては聖糧の守護は出來ぬ。「過勞を避けて能率の減退を防げ」の指導原理と、こゝに矛盾が生ずるのではあるまいか。營團人の私がこんな事を言ふのは不都合千萬で、他聞を憚るが絶対配達主義は、少くとも現在の勞務を確保し得る間は之を貫き通さねばならぬ。が將來次第にふえる仕事に對して次第に減る勞力で、不可能を可能とする努力が實際に於て何時まで續くであらうか。極く最近に或る出張所で過勞の爲に寝込んでゐるものが全従業員の一割に達してゐる事を聞いた。無論話しは半分に聞いても可い。事實の眞偽は別として當該出張所の責任のある人の話しを聞き捨てにする事も出來まい。配達が勞務の全部ではないが、「絶対配達」の本質主義は一度考へ直さねばならぬ時機が遠からず來るのではあるまいか。業務用の配達については既

にその時機が來てゐるのではないかと思はれる。

本年五月に於ける取扱量と従業人員の比率を調べて見ると次の通りである。

區	出張所	分	取扱量	従業人員	一人取扱量	一人取扱量
					日	日
出	張	神戸市内	二〇四、一六〇俵	一、四六八人	一三九俵	四、六俵
		神戸市以外	一五八、六八〇	一、三三四	一二〇	四、〇
		計	三六二、八四〇	二、七九二	一三〇	四、三
支		部	一七四、五五〇	二、一八八	八〇	二、七
合		計	五三七、三九〇	五、三七六	一〇〇	三、三

人口の稠密してゐる處程取扱量が多い事を示してゐるが、支部の取扱量が少いのはそれだけ仕事が樂な事を示してゐるものではない事は勿論である。神戸市内の四、六俵に對して舊東京市は四、一六俵となつてゐる。

營團員が配達せなければ家庭から配給所へ取りに來る。營團の勞力に代つてより以上の家庭の勞力を使

ふ事になるから、國家的に見れば何も得るところはないと言ふ見方もあるが、同じ勞力でも無理に絞り出すのと、樂に出すのと結果に於て餘程違つて来る。營團員がへとへとなつて届けた米を一升瓶の中で丹念につゝいて居る餘暇と勞力があるならと言ふのでは決してないが、消費者の家庭にはまだく相當の餘力が、潜在してゐるのではなからうか。こんな消極的な考へ方は良くないが、假りにせめて隣保單位に配達をすれば餘程違つて来るだらう。消費者や配給所に成るべく少量の米しか保有せしめないと言ふ國策の上から、配達の量も回数も、家庭持込みと變りはないが、受渡しや代金回収の手数が大變省ける事は間違ひない。こうなれば隣保の共同炊事と言ふ事になるが、兎角議論があつてもどうせやらねばならぬ共同炊事なら、營團の常に唱へる「食生活の指導」もこゝまで手を延ばすべきであらう。

手數と言へば配給所の事がこれによつて大きに助かる。一体配給所の事務はもつと簡略に工夫すべきであるまいか。これによつて主席以下の配達勞務を少しでも助成したい。配給所だけでなく精米所、支部、出張所、本部まで營團全般に亘つて事務は必要最少限度に止めたい。いざとなれば一部の事務は捨てる場合があるかも知れぬ。長以下全力を擧げて配達に挺身する事もあらう。事務と勞務との人員の割合、男女老若の關係、指導監督者の範圍等營團の勞務を中心とする人員の整備問題は又別の調査に願ひするとして、事務の擔當者がもつと勞務に出稼ぐ事である。薯の荷役に本部の協力隊等は至極結構な著想である。

自ら馬を輓いて炎暑の數日間病める馬子の代りを勤めた出張所の主任がある。運送課員の一人一人が時によつて自ら輓馬の轡を採る位の事は平氣でやらねばならぬ。

イ、荷 車

白轉車、リヤカーの補給が出来ないとすれば、獨り手車に頼るより外はない。これ又鐵、木材、ゴムと言ふ資材難と製造勞務の不足で、一臺の新調も容易でなくその修理さへ間に合はぬ状態である。價格も製造業者の言ひ分と大きな開きがあつて、營團あたりが正直に注文しても一向にお鉢が廻らぬ。價格も規格も府縣によつてまち／＼である。これ等も地方行政協議會を利用すればどうかと思ふが、先づそんな事を頼むより精々中古車を探し出す事である。大八車、中車、小車から乳母車に至るまで、ゴム輪、鐵輪、何でも結構、凡そ配達の用に立つものは見付かり次第買取るべきである。營團一萬二千の眼で探し出せば、納屋の隅で遊んでゐてまだ使へる荷車が見付かるに違ひない。序でに最近ある配給所で従業員が申合せて附近の荷車を借受け、その借用賃を自費で出し合つて配達任務を全ふしてゐると言ふ美しい話を聞いた。出来る事ならこんなのは營團で強いて買取りたいものである。新調車もぼつ／＼出来る事だし、こうして各配給所毎に壹臺以上の荷車は必備する方針の下に努力してゐる。自分の配給所には有るからと知らぬ

顔でなしに、まだ無い所の分を協力して探して貰ひたい荷車に米類のバラ積を考へた事もあるが、遺憾ながら今の處適當な思案が浮ばない。

ロ、自 轉 車

自轉車はもと／＼荷物の運搬具として作られた物ではない。重い荷を積んで配達の用に供する事は根本的に間違つてゐる。由來日本人は自轉車を操縦する事にかけては世界一の上手と言はれてゐる。資材の豊富な時にば存分に利用すべきであるが、將來は其の本來の用途位に止めて、精々大切に取扱ふ事である。損耗して補修が出来ないと有事の際に重寶な連絡機關に事を缺いで悔む事が必ずある。

リヤカーも同様、これから頼りに出来る運搬具でない。現有のものを大事に取扱つてその壽命を引伸ばすと言ふ消極的な考へ方より仕様がなない。

小型自動車については貨物自動車に於けると殆ど同じ考察である。こゝに重ねて述べる必要はないが唯違ふのは乗務員の保健問題である。一般従業員に較べて特殊な技能を持ち、常に頑丈な身体を驅使して危険の伴ふ激務に従事してゐる。聖糧の配給戦士であり輸送戦士である。身も心も一倍疲れる事であらう。その健康保持については當人は元より、周圍のものも特に注意を要すると思ふ。

ハ、其

他

營團の大家族主義から言つても出張所、支部の獨善主義は可くない。近隣相扶けて随時に勞務の交流を行ふ事も必要である。朝夕無闇に遠い勤務場所へ通勤する無駄な勞力も省きたい。配給所の位置も配達勞務を重點として考へ直し、適當でないものは多少費用が要つても之を置き換へねばならぬ。將來もし配達が出来なくなつた場合、消費者側の立場から見ても是非必要である。

國防團や、婦人協力隊の勞力は常時使ひ過ぎてはならぬ。有事の際の弾力性を失はぬ様、絶へず餘裕を残して置くべきである。



早場米勤勞奉仕の記

庶務部庶務課 徳原 莊太郎

(一)

昔氷上郡吉見村に洞々といふ俳人がゐた。其處を訪れた加賀の青虬といふ俳人がその時の感想として、

霧深し それだけ人は 古風なり

といふ句を詠んだ。吉見村は鴨庄村の隣りで、

これは文化年間の話であるが、私共の勤勞奉仕に行つた鴨庄村にも、よい意味に於いてこの事がいひ得られると思ふ。

さて鴨庄村は、

「柏原にすぎたるものが二つある。金紋先箱、

虎の皮」

とうたはれた柏原の街から、三つ目の市島驛を

東方に約小一里、山を越え、盆地を過ぎ、峠を越して遙々と京との境近く迄来ると、四方美しい山容に囲まれた大きな村に出る。部落を七つ持ち戸數五百、人口三千の大村で、行政機關として、村役場、産業組合、村農會三團體の綜合本部が、幅三間半の縣道に添ふてあり、東約十町のところに鴨庄國民學校がある。その間先づ附近の農村生活に差當り必要なものが揃ふだけの小店舗が軒を並べてゐる。氷上郡誌にもこゝは山間の別天地と誌されてゐるし、村營の發電所さへあつて、村内の電燈、電力を独自の經營に於いて行つてゐる位である。

主計課の村上君と自分の二人は柏原で一行と別れて十一月二十五日午後四時市島に着き、同驛前

の農業倉庫で自転車を借用、霧雨の晴れた街道をタイヤの音も軽く鴨庄へ／＼と走る。沿道の美しい風景も次第に高原味を帯び、山腹に雲の去來するあり、照つたかと思へばさつと曇る丹波時雨のサラ／＼とするかと思へば、峠を一つ越えた向ふの村は晩秋の夕陽に照り映えてゐるといふ、誠に端倪すべからざる風景である。

漸くにして三團體の綜合本部に着、産組の専務代理鹽見さんに會ふ。素晴しき巨人である。少し誇張が許されるならば同氏の吸つてゐる普通の煙管が恰で妻楊子の様に見える位である。名刺を出して來意を告げ、營團の意のある處は、

「力足らず、技及ばずと雖も戦時下農民の辛勞を思ひ、吾々の誠心誠意なる奉仕が農家の人々

を激勵し、刻下の早場米供出に寄與するあら

ばと思つて参つた次第、自分達に出来る作業な

ら何でもやりませう」

とハリキツて見せると、

「へえ、さうですかい。そしたら貴方がたは本

部で事務をとつてなさるんで…」

と些か案外らしい模様。よく聞き糺すと、村當

局では依締め専門の熟練者が來るといふ風に聞いて

てゐたといふのである。詰り依締め人夫でも來る

様にある。總體に今回の行事については現地側

との連絡わるく、當方の意ある處が全然理解され

てゐなかつたと思はれる節を、あちこちの派遣部

落に於て見受けられたさうで、この點本部に於て

もまた現地側に於ても、深く考慮し爾後の計劃に

萬全を期せられたいと思ふ。

さて驚く鹽見さんに自分達の氣持を傳え、向ふの話も伺つた結果、

「いやそれはどうも御苦勞様でした。まあお出來になるかどうか分かりませんが、やつてみて下

ろ？」

といふ。そして吉見峰次さんと同産組の役

員さんに紹介された。この人と荻野徳次郎さんと

いふ兵隊歸りの温厚な人と二人に終始御厄介にな

つた。この吉見さんに案内されて、市島驛より奥

へ唯一軒といふ田中屋旅館に行く。こゝが五日間

の自分達の本陣である。構えは仲々立派ないゝ宿

である。二階の一等間八疊、二等間四疊半を提供

された後は四疊半二間、三疊一間である。他に客

らしい影もない。差當り買切りといふところ。

然し乍らこの宿、老夫婦二人で經營してゐるところを見ると、或はどんな客にでも一等間を提供されるのかも知れない。とにかくゆつくりする事は間違ひない。けれども電燈の暗いのは閉口、二つの居間に五燭光位のもが一つポカとついてゐるだけ。本も読めねば字も書けぬといふ始末、幽霊でも出るのぢやないかと思ふ位だ。早く寝て終ふより手が無い。神戸に較ぶればとても物凄く寒さだ。雪が来るのではなからうか。五右衛門風呂にとび込んで直ぐ夜具に入る。炬燵がしてある十一月の末といへば暖地神戸では珍しいものだ。然し誠によい氣持である。晝間の疲れで直ぐ桃源境に入つて終ふ。

かくて鴨庄の一夜は靜かに更けてゆく。

(二)

鴨庄第二日目である。

目が覺めたのは午前五時頃外は眞暗である。山に圍まれた盆地の夜明けは遅い。今頃神戸では空谷さん、中川さん、杉本さんに中塚さん、黒瀬君等配給課を中心とした營團の人達が山へ山へと續いてゐる頃だと思ふ。たとへ暫くでも習慣付けられてゐるセイかすぐ起きる。寒風の中を朝の散歩だ。鶏が鳴き牛が啼く。村の夜明け前は賑かだ。歸つてから洗面して東方を拜し父母を思ふ。とかくする内朝食の準備が出来る。味噌汁に香のもの

一汁一菜、合掌して戴く。

さア今日から愈々作業開始だ。ゲートルを巻いて、下腹にグツと力を入れると寒さもケシ飛んで元氣體内に溢れる思ひだ。宿のをばさんが、

「貴方達若い元氣なお方を見たら、うちの息子を思ひ出します」といふ。

「息子さんは」

と尋ねると、

「戦死しましたのや」と。

あゝこの家も「忠烈無窮」の家か、自分達若い二人の胸には一瞬限りなき感動が流れる。然し詳しい話は何れ歸つてからと産組に行く、もう荻野さんが来てゐた。

「お早やうさん」

といへば、

「お早うござつす」

といふ。この「ござつす」と詰るいひ方はこゝではよく耳にすることである。一寸氣持ちのよいアクセントである。

こゝは昔京の賀茂御祖神社の莊園で賀茂の莊と呼ばれ、夫れが何時しか鴨庄となつた處である。こゝの村長さんの吉見傳左衛門氏の作になる鴨庄音頭にも、

へア、アー、アー、深山の奥にほゝえむ櫻
いかこや姫の由緒より賀茂の莊とぞ呼ばはれるソレ

さても芽出たい私の里よソレ、シヤントシ

ヤン

とある様に平安朝時代から既に京と交渉があつた譯である。宿で聞いたこんな話を瞬間思ひ浮べてゐると、荻野さんとうちの村上さんの間で話が進められ、結局やはり依頼作業をする事に落付く。「お出来になつても、ならいでも」やらねば仕様がな。分らぬ處は御指導願ふとして、

「さア行かう。」

と出掛ける。その前に荻野氏宅の五俵を小運送に頼まれる。

「よろしい、やりませう。」

空車曳いて出てゆく。朝日はすつかり上つて山の中腹に雲が棚曳き乍ら流れて行くのを見る。あちこちに一叢々々の竹藪があつて、その傍に格好

のよい藁葺の農家がある。赤い椿の花が咲いてゐる。一寸とした家には白壁の土蔵をもつてゐる。

村の傳統と裕福さが偲ばれて床しくも美しきものに思ふ。晩秋の朝陽を一杯に浴びて白い土蔵の前で、鄙唄歌ひ乍ら子守する娘の姿は一幅の繪である。文化映畫にでもしたら詩的な一齣が出来ると思ふ。腕に「勤勞奉仕隊」と記した腕章を巻いてゐると、それを見て向ふから禮をする。最初は誰れにしてゐるのかと思つたが、自分だと知ると面映ゆい氣持である。然し二三回されるとそれから挙手の禮を以て答へられる様になる。

荻野氏の家で眞新しいカチカチの俵を積むとズシツと重い。何糞と凸凹道を二人して曳く。來る時はさほど遠いとも思はなかつたが歸り道の遠い

こと。何の事はない水泳に行つて沖から陸を見る

様である。産組の隣りに製材工場があつて高い煙突が立つてゐる。それが遙か彼方の様に見える。

「頑張れ〜」

で曳いてゆく、ふと向ふを見ると同じ道をうら若い娘と六十を越えた年寄とが、同じ様に五俵程の荷を軽々と曳いて行く。見る／＼うちに間はあいて終ふ。農村の人達の元氣さに感心。先方に感心してもこちらの車ははかどらない。正に流汗淋漓たるものである。妙高嵐もなんのその。

「あついな」

「あついな」

といひ合つて力を出す。漸くにして産組の倉庫に搬入する。荻野さん

「濟みません〜」

と出て來て俵を抱えてポイ／＼とほうり込む。細い體にあの力がどこにあるのかとまた感心のところ感心の連続である。

やがて案内されて依頼に行く。最初の家は吉見ヌイさん方である。一體この村は吉見姓が多い。吉見村との何か關係があるのかと思つたが聞くのを忘れた。ヌイさんは五十二三の後家さんで、家にはお花さんといつて二十六になる娘と國民學校一年生の小さい女の子の三人暮しである。聞けばこゝも名譽の家で長兄次兄ともに出征してゐること。長兄は何でも豊岡でちりめん屋をしてゐたが、お召を受けたので子供を國許へ預け、店は嫁さん獨りでやつてゐるうち、今度はこちらの次

兄も亦召集になつて征つたのだといふ。それが三年前の話。ためにお花さんは何處へも嫁に行かず家事の手傳をしてゐるとの事。こゝにも聖戦に捧げられた貴い純潔の處女を見る。吾々は何としてでも勝たねばならぬ。國民の一人一人の幸福がこんなにして捧げられてゐるのではないか。やらう頑張らう。たとえ掌は赤くはれ様とも、筋肉がこわばつて力が抜けさうにならうとも頑張るのだ。俺等のこの一締めの方がこの美しき犠牲に對するせめてもの思ひやりであり慰めであり、夫れがひいては戦ひに勝ち抜くための力となるのだ。荻野さんの指示を受けつゝ唯もう一生懸命に働いた。

この意氣と精魂を傾注した作業の結果は夕刻に至つて二十俵の米が品種別に積み上げられ、俵箋

を附して何時でも出荷出来る様になつた。

「あゝやれ〜」

といつて中腰をグツと延ばしたときボキといふ音がした。腰が痛かつた。もう手などは繩を握つても力が入らぬ位だ。それでもヒゲ（俵の表面に出てる屑藁）をむしつたり、繩のゆがみを直したり、何とはなしに自分の汗と脂の勤勞の結晶を眺める氣持は心よいものである。澁茶に咽喉をうるほし乍ら外を見れば周囲は少しづつ暗くなりつゝある。山國の夕暮は早い。西天ヶ嶽の後深く入つた夕陽は、殘光だけをコロナの様に、圓い山頂一杯に出して沈んで行く。

「さア歸らう。」

二人が腰をあげると、メイさん花さん手をとら

んばかりに、

「お蔭様で」「お蔭様で」

を連發して後いふ術さえ知らぬ位。こちらも何だか嬉しくなつて、

「おほけに」「おほけに」

を連發して別れを惜しむ。坂を降つて振返れば未だ見送つてゐる。

「さようなら」「さようなら」

息子さんや兄さん達の歸る迄、幸せのこの上に積れかしと祈りつゝ夕暮の野路を宿舍へ歸る。

(三)

鴨庄第三日目である。今日は有牛徳次さんの家

へ行く。こゝは徳次さんが出征してその留守を、老母と徳次さんの細君と子供二人で守つてゐる。老母と細君で田をして、十五俵の供出米を出すといふ。丹波といふ處は總體に女がよく働く國である。年がら年中なりふり構はず働きづめで、而も一言の不平も鳴らさず、唯家の爲めにこまめに働いてゐるのである。米の供出が濟んだら山へ木を伐りに行く。それを束ねて軒に積み、一冬の燃料とし、雪が降り出すと火を焚いて藁仕事である。一本一本「ソープ」をしごいて俵を編み、繩をなひ、草履を作りなどする。女達はその間がまづ休みの様なものだといふ。暖くなつて桑の葉が繁つて來たら蠶を飼ふ。夜の目も眠らずに守りをし、それから田植にかゝる。その間には麥も刈らねば

ならず、田も鋤き返さねばならない。子供の養育もせねばならず、婦人會だの、銃後奉公會だのがあつて、それにも亦一役持たねばならぬといふ有様。吾々都會人は農村のこの健氣な女性達の勤勞振りを見て、深く顧みなければならぬのではないのかと思ふ。

さて有牛さんの家へ荻野さんに案内されて行く
と、小柄な妻女に迎えられ、

「こちらにありますんぢや」

と納屋の戸を明けてくれた。見れば納屋一面にござを敷きその上に十五俵、角力取りの様に中ぶくれのした圖體をのしと列べてゐるカマリ（上下の俵口を縄で締め上げる事）がしてない。

「うーむ。」

る。今日は第二課のカマリに就いてある。これの根本原理は締めた縄に力を均等に負擔さす事であつて、一劃の縄と雖も遊ばさない様にせねばならない。有休有閑の徒輩を排斥する現下の國家情勢にも似たるものかなと思ひつゝ締める。町の者はとかく理窟が多くて仕様がなない。

さて一、二俵を荻野さんと一緒にすると先づ呑み込めた。昨日は荻野さんを一日引張つたので組合の仕事がつかへたといふ。氣の毒なので今日は二人でやりませうと云つて歸つて貰ふ。自分がカガリをして村上さんが俵締め器で締める。五本締つたら自分が縦縄をかける。順序は決つたが相當時間がかかる。晝前この村の農事部長吉見力藏さんが、

昨日のヌイさんは二十俵全部上下共してあつたのになと思ふが、ヌイさんは、この女がよく働く村のうちでも一番勝氣な女で、普通村中の寄合ひ仕事でも、女の中で働かず、男に混つて働いて決して負けはとらぬといふ位だから、あれだけ出来たのださうで、その點この有牛さんの嫁さんは女らしいが、それ程な力仕事が出来ないのだとは荻野さんの辯。なる程、そこもある。ぢや一つカマリ方を教えて貰はふ。

何しろ昨日始めて俵締めの概論を終り、第一課として俵締め器の基本操法を習得して、實際に演練する場合荻野氏から「そこはこう」「向ふはあ」と指示を受けつゝやつたのであるが、それでも先づ急がねば充分締められる迄になつたのであ

「どうです、手が痛いせう。」

と入つて来る。そしてわしも一つ手傳ひませうかと氣輕に上つて来て、俵をコロ／＼と轉がして足で蹴つて締める。實にうまいものである。カガリをする。グツと引いてトンとたゞく。掌は一尺平方もあるかと思ふ位縄がギュツと悲鳴をあげる様だ。之は結局技と力との調和がとれた熟練の結果だと思ふ。

かくして夕刻に及んで十五俵完成。序でだから産組へ搬入して上げる。こゝでも「有難う／＼」の感謝を背にして歸る。

男ごゝると秋の空。丹波時雨がサラ／＼と顔にかゝる。宿の灯がぼうともつてゐる。三日しかならぬのに南の神戸が戀しい。

鴨庄第四日である。

今朝ふと気がついたことは、こゝへ来てから新聞を讀まないことである。この宿に新聞がとつてないからでもあるが、神戸では朝刊を讀まねば朝食がまづい位なのに、四日も讀まずして初めて氣付くところ全く不思議な現象である。これは體が疲れてゐると慣れぬ宿屋住ひで氣持が落付かないのと、また一方に於て「村の事」を一寸でも多く見聞したいからであつて、誰彼なしに掴まへては話を聞いたからでもあらう。ともかくに自分乍ら可笑しいものだと思ふ。

さて自分はこの氷上といふ言葉について、何か由緒でもあるやうな氣がしてならなかつたので幸ひこゝにゐる間に尋ねてみたいと思つた。

和名類聚抄には「比加三」とあり、日本書記の崇神紀六十年七月の條に、

「丹波氷上人名氷香戸邊」とあり、同じく天武紀二年二月の條に、

「尖人藤原大臣女、氷上娘生但馬皇女、次夫人氷上娘弟五百重娘、生新用部皇女」

とあり、また公卿補任、天平勝寶九年鹽燒王の條に、

「八月三日賜氷上真人、叙從三位」

とあつて氷上といふ語が如何に古くから史上に存在するかを證明し、更に郡名としては、天武紀に

「白鳳十三年丹波國氷上郡言有十二角犢」

とて天武天皇の時すでに郡名が誌されてゐるといふ。

果して自分の想像は裏切られる事なく、この由緒ある土地に由緒ある村で、尊い勤勞を捧げて、國策遂行の一戰士として奉仕し得ることを嬉しく思つた。

村の生活を側面から靜かに眺めてゐると、それは全く草木が芽生えて成長して行く様に、長い年月を目標にしてジツクリ腰を落付けて成長して行く風に見える。牛歩は遅々であるけれどもよく千里の道を歩む。この村の色々な話を聞いてゐると銃後日本の一單位として、國の大方針に一步一步前進してゐるのを見る。

曰く荒蕪地の開墾。村の西方十數町歩の荒野を村人の勤勞奉仕に依つて東京内原訓練所の指導のもとに開墾して年額五千貫の芋を産出してゐるといふ。

また曰く、東北に一大貯水池を設けて千何百町歩の灌漑を一手に引受け、その水深實に六十餘尺一谷全部を堰き留めて昭和十年起工し、同十五年完成といふ素晴らしい大工事をしたといふ。

その他米の増産、麥の強制的播種等、山間僻地の別大地と雖もその努力並々ならぬものを見る。然るに或る農村青年の曰く、

「自分達が作つて都會に送る農産物は値上りを見る事全く稀であるが、田舎に這入つて來る種々の生活必需品は次第に粗製になり、値が高くなり

つゝある。而も都會人は田舎に入り込んで農民に
開取引を教へて呉れる」云々と。成る程このいひ
分尤もな點もある。然しまた農村のみの立場に於
いて言ひたい事をいつたといふ點もある。こゝの
村長も亦それを認めてゐられるといふ。

さて村長さんといへば自分はいつも行違ひにな
つて村長さんには直接お話は伺へなかつたが、村
人達の話から察して村長は事業家であり、學者で
あり、勤勉家である。先に書いた大事業は村長の
立案であり、率先躬行、村の大衆を引張つて自ら
鋤を握り槌を揮つたといふ。然も功を誇らず所謂
村長業者にはならず、自らも牛の草を刈り、田を
耕してゐる。さればこそこの里の人はみな村長を
慈父の如く慕つてゐる。

(五)

さてこの日は宿舍田中屋の五俵を締め産組に搬
入して検査を受けた。五俵であるから午前中に作
業は済み、午後は吉住保次さん方へ行く、こゝで
は昨日より又新しい課目が増し、俵が編んである
だけで米が入れてゐない。従つて米から量つて入
れねばならない。とにかく第三課である。今日は
吉見峰次さんについて俵の作り方を習ふ。これは
比較的簡單なのでスラ／＼と覚え込む。米をはか
るといふ段になつてこの家の老母が、
「ワシがしますで」
といふ。やつて貰えば結構ゆえお委せて置く

お百姓はこの米の計量といふことについて非常に
デリケートな神経をもつてゐる。吾々の想像も及
ばぬものがある。斗斛で四回、俵に入れてカンカ
ンする。十七貫六百、俵が一貫五百で百の込斛、
上々である。

婆さん仲々うまい。かうして計つて入れてゐる
内に夕方になつて終ふ。作業に熱中してゐると、
時間のたつのが分らない。こゝは村では東の高見
に西向きに立つてゐるので、夕陽が沈んで終ふ迄
照つてゐるが、何時しかあたりに宵闇が漂ふて來
た。時計を見ると五時である。然しこの儘やめる
譯にはいかない。明日中にはとも出來上りさう
にないから。況して明日一日でこの勤勞奉仕の作
業は打切りである。途中迄してその儘放つては歸

れない。

「どうだ、今日は一つ夜勤しやうか」
「さうだ、やらう。」
二人は忽ち一決。おばあさんにその由を告げる
と、おばあさんは細い眼に皺寄せて。

「濟まん事だす。濟まん事だす。」
と何回となく繰返して自らも亦出來ぬ乍らも手
傳をする。暫くしておばあさんが納屋にゐなくな
つたと思つたら、頬の紅い娘が一人おばあさんの
替りに黙々として仕事してゐる。短いモンペをは
いて、体格のムチツとした娘である。

「あんた吉住さんの娘さんか」
と村上さんが尋ねる。
「は、……あの御苦勞さんです。」

ニコツと笑つてペコツと御辭儀をする。仲々愛嬌のよい初々しい娘である。今日は隣保の共同田の稲こぎに行つてゐて、今歸つたところだといふ名前はお露さんといつて、今年十八、神戸の叔母の家に家事見習の爲め暫くゐたが、兄の召集に依つて歸つて手傳つてゐるといふ感心な娘である。田舎の子がたとえ暫くでも都會の生活をしたら仲々かうは出来ないものである。

「感心や〜」
と賞め乍ら仕事する。

今夜は月はないが星座の饗宴である。星明りに向ひの山の肩の線がほのかに浮いて見える。麓の村の屋並からこちら、田圃の中には一叢々々と竹藪やら鎮守の森やらが點綴して、靜かな鴨庄の夜

景を描いてゐる。

「かうしてみると仲々よい景色だな。」
一服つけて休憩し澁茶に咽喉をうるほせば、厨の方でお露さんが歌ふ鴨庄音頭が流れて来る。

小聲で口ずさむ様に歌つてゐるのだが、靜かな夜氣の中にはよく聞える。汗ばんだ肌はこの沈々たる夜氣は快い觸感を與えてくれる。

それからまた一仕事、時計の針が直角の九時をさしたとき漸く明日にしようといふ一旦中止する。

「明日は早くから來ますよ」
といへば、

「濟まん事です。濟まん事です。」

と二人が恐縮する。

山陰になつてゐる暗い小道を本街道迄慣れたお

露さんに送つて貰ふ。

この日は宿へ歸つて慾得なしに炬燵に入つて終つた。

(六)

今日は五日目である。早いものだ。明日の夜は懐しの神戸だと思へば子供の様な嬉しさを感じる之ではとても南方どころではなさそうだ。といへば村上さん、

「そりや南方行なら又覺悟も違ふしな。」
と負けぬ氣を出す。朝飯もそこ〜に吉住さんの家へ行く。今日は是非共晝迄に仕上げやうと二人は馬力を出す。十時頃この娘が

「たんと來よつてや。」

と街道の方を指さす。

「何が？」

と鎌を片手に出てみれば吾等の仲間でも錚々たる猛者、米配課の後藤氏に厚生課の久野氏、飾磨にこの人有りと知られたる井野氏に、相撲の本場伊丹の酒上氏、何れ劣らぬ面々がその雄姿も颯爽と銀輪を連ねてこちらへ来る。

「應援に來ましたぜ。」

「さアどれからやりまほ。」

「うわ〜シツカリ締めとつてだんな。」
一時に賑かになる。別天地なる鴨庄の奥山住ひで、村上さんと二人だけの暮しに營團の紋を見ると急に心楽しくなる。

「これや〜」

「これはカガリが出来たさかい、胴しめてか」

「これは未だ縦縄入つてないぞ」

等、ワイ／＼いひ乍ら作業にかゝる。暫くすると奥で餅を搗く杵の音

「おや／＼未だ正月早いのに」

といつてゐるところへ、箇ころを山盛りにして持つて来る。

「そんな氣を使つたらいかんがな。」

「そんな事したら、あんたとこ何の爲めに勤勞奉仕を受けたか分らせん。」

「ほんまにおばあさん、之は困る」

と、交る／＼辭退すれば、

「ばばアが持つて来たさかい喰べて呉れなはらんか」

といふ。之は困つた。

「そんな譯ぢやないが」

「そんなら拜みますから喰べて呉れなはれ」

といつて本當に拜み出す。益々困つて終ふ。結局その熱意と感謝の氣持の現はれとして折角の御馳走だから戴く事にする。全く相濟まぬ次第である。

「この家はな昔から人が來たら何も無いから、かうして出しますのや」

といふ婆さんの嬉しそうな顔。この楽しみも果して何時迄續くかと思へば、おばあさんが可愛さうになつて来る。

一服が済んで又一働き、見てゐるうちに片付いて終ふ。豫定の通り午前中に完了。

「やれ／＼」

「御苦勞でした。」

「御馳走様でした。」

「また來年頼みますせ。」

「はア、おばあそこへ一番に來やうか」

「さう願えりやな。」

米穀配給課の後藤氏は僅か一二時間でスツカリ家の人と心易くなつてゐる。アツサリした者は得だ。といつて後の者皆感心。やがて家人やお露さんに見送られ萬腔の感謝を朴訥な方言で受け乍ら

「さよなら／＼」

「さよなら／＼」

と歸つて行く。

自分達も亦後仕末をして歸る。「今度はこんな

事でなしにゆつくり來て下され。春にでも」とい

ふ。有難う／＼。純情な山の人のこゝろに觸れた温か味だ。勤勞奉仕は濟んだ。全く肩の荷を降した様な思ひだ。宿へ歸る。吉見峯次さん、荻野徳次郎さんが來てゐる。互に思ひ出話を出し合つて笑ふ。村長さんの家へ勤勞奉仕終了の挨拶に行く手をとつて喜んで下さつた。荻野さんと共に鴨庄自慢の大池を見學に行く。想像よりも廣大で立派なのに感心した。

「來年夏來て下さい。三尺位の鯉がたんとゐますよ。」

といふ。歸りに吉見峰次さんにまた出會ふ。吉見さんは周圍一體の山を指して松茸の出荷率は縣下一番だから、來年秋は、神嘗祭頃には是非來て

下さいと誘はれる。

「有難う〜。」全く皆のこゝろからの親切には感謝の外はない。

宿に歸つて鴨庄最後の晩餐會を開く。暗い電燈の下で村上さんと目分と、膳二つ並べてお菜は三品、酒なしの慎しやかな晩餐會である。何はなくともお互の心のうちにあるいひ知れぬ満足感が、この暗い部屋もシャンデリア輝くオリエンタルか神港グリの様に感じさせ、二品三品の粗餐もテーブルに溢れる山海の珍味の思ひを抱かせる。昔學校で習つた

「肘を曲げて枕とするも楽しみまたその内にあり」

の言葉を思ひ出す。

満ち足りた心地で炬燵に入る。夢路に通ふは五日間の快い思ひ出である。

夜が明ける。十一月三十日である。午前八時産組に行く。村長さんを初め産組の役員さん。村の有力者達が集つてゐる。夫々色々な話が出る。自轉車を借用して歸る仕度が出る。みんな表へ出て見送つて呉れる。

「有難う〜。」

お互に感謝の言葉を交し夫々に別れを惜しむ。

荻野さん、吉見さん、共に握手をして神戸へ來たら寄つてくれといへば來年は是非待つてゐるといふ。名残は仲々盡きないがかくては果じと、

「さよなら。」

「さよなら。」

と車上の人となる。自轉車は一路市島驛へ走る

かつて二十五日の夕べ正に暮れなんとするころ、

美しき肢體を以て吾等を迎えてくれたこの氷上の

山野も今は別れを惜しむに似て朝日の中に眩しく

またゝいてゐる。あの時はサラ〜と顔にかゝつ

た丹波時雨も今はさん〜たる陽光の饗餐である

「さよなら〜」

美しき氷上の野よ。山よ、河よ、橋よ、いつの

日か我また汝を見ん。市島に着いて九時二十分の

列車に乗り柏原に來りて一行と合す。

438
266

刊既書叢營食庫兵

- (一ノ輯一第) 定規諸團營糧食縣庫兵
- (輯二第) ていつに團營糧食縣庫兵
- (輯三第) 説解の部務業一第と團營
- (輯四第) てい就に所談相婚結縣庫兵
團營糧食

昭和十八年九月十八日印刷
昭和十八年九月廿三日發行
〔非賣品〕

神戸市兵庫區宮前町二九

兵庫縣食糧營團

編輯兼 理事長 直木 太一郎

神戸市兵庫區松屋町二四

印刷人 徳山 正雄

神戸市兵庫區松屋町二四

兵庫縣食糧營團印刷工場

印刷所

神戸市兵庫區宮前町二九

發行所 兵庫縣食糧營團

(西兵五六)

終

